

建設現場で働く人々の
誇り・魅力・やりがい検討委員会提言
～建設現場でいきいきと活躍するために～

建設現場で働く人々の誇り・魅力・やりがい検討委員会

目次

第1 建設現場の現状と課題

第2 「誇り・魅力・やりがい」向上に向けた取組の方向性

- (1) 建設現場で働く人々の「誇り」「魅力」「やりがい」とは
- (2) リブランディングに向けたアプローチ（基本的な考え方）
- (3) 建設業のリブランディング

第3 具体的な取組

- (1) 全国展開の施策
- (2) 点から面となった取組へ ～官民一体となった体制の構築～
- (3) 各地域ブロック単位での取組・施策
- (4) 他業界とのコラボレーション・土木学会との連携

第4 おわりに

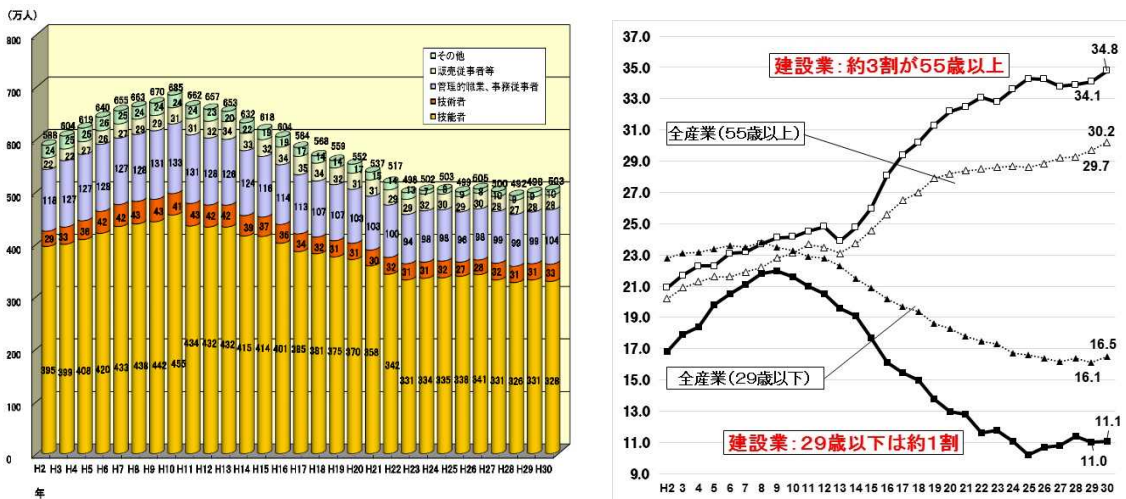
「建設現場で働く人々の誇り・魅力・やりがい検討委員会」提言 ～建設現場でいきいきと活躍するために～

第1 建設現場の現状と課題

建設産業は、人の毎日の生活の基盤となる住宅をはじめ、道路、河川、港湾、鉄道、空港、上下水道などの社会資本、さらには経済社会の発展の基礎となる工場や事務所等の産業施設、学校や病院などの教育・社会施設など、私たちの暮らしを支える経済社会基盤を建設・維持管理していく「社会資本の担い手」として、社会にとってなくてはならない産業である。

また、災害時には、最前線で地域社会の安全・安心の確保を支える「地域の守り手」として、大変重要な役割を果たしている。災害時の極めて厳しい状況の中で、危険を顧みず、地域社会を支えるという使命の大きさは、東日本大震災や各地の豪雨災害等での活動において、改めてその重要性が再認識されたところである。

こうした中、我が国の生産年齢人口は1995年をピークに減少局面に突入しており、建設業就業者数もピーク時（1997年）より約28%減少している。年齢構成別では、55歳以上が約34%を占め、29歳以下が約11%にとどまるなど、全産業の中でも就業者の高齢化が著しく進行している（図1）。今後10年間に、60歳以上の高齢者（約25%、83万人）の大量離職が見込まれており、それを補う若手入職者の確保、次世代への技術の承継が喫緊の課題である。



出典：国土交通省資料

出典：総務省「労働力調査」を基に国土交通省で算出

図1 建設業就業者の推移と年齢構成の変化

しかしながら、建設現場の厳しい労働環境や過去の批判的な報道等の影響から、建設現場には「3K（きつい、汚い、危険）」に代表される負のイメージが根強く残っており、製造業やIT業界に比べて労働環境イメージが大きく劣っているのが現状である。日経コンストラクションが実施した調査によると、「身近な若者や自分の子どもに、建設業界への就職を勧めるか」という質問に対し、建設業界に従事する回答者の約半数が「勧めたくない」と考えていることが明らかとなった（図2）。

**Q. 身近な若者や自分の子どもに、
建設業会への就職を勧めるか**

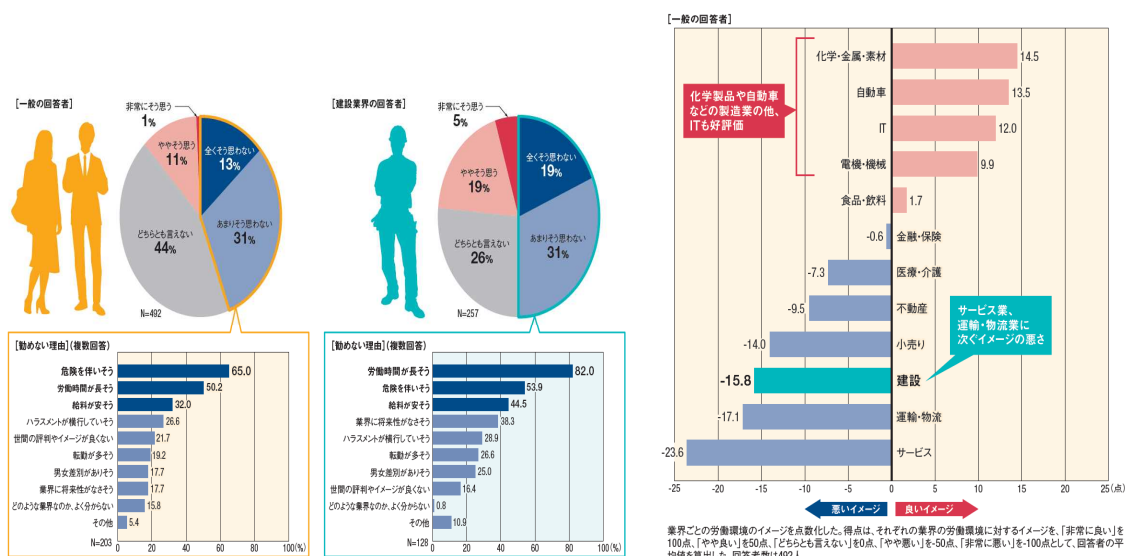
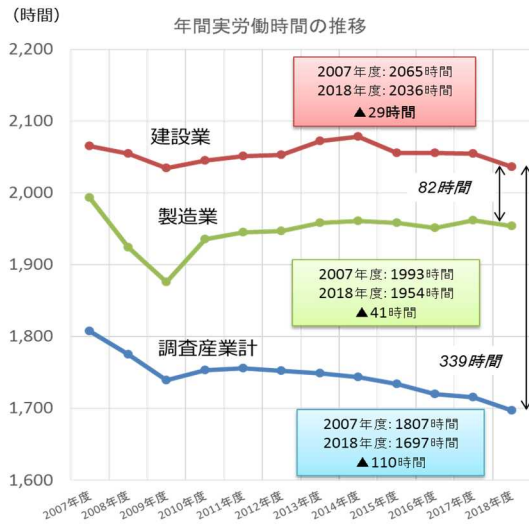
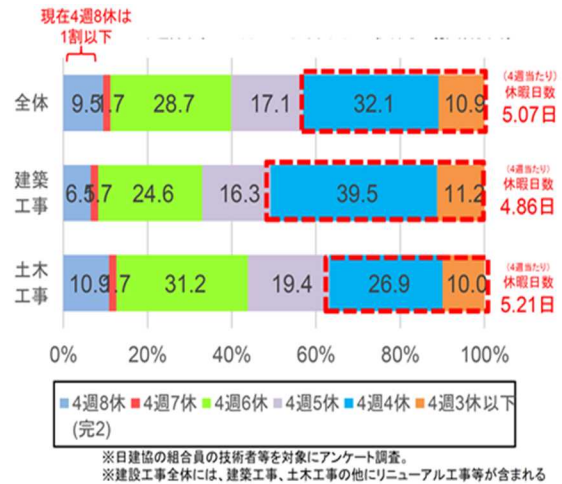


図2 建設業へのイメージ調査結果

加えて、建設業は全産業平均と比較して長時間労働となっており、他産業では一般的となっている週休2日も十分に確保されている状況ではなく、約43%の人が4週4休以下で就業している状況である。将来の担い手を確保する観点から、働き方改革を強力に進め、建設産業を若者などにとって魅力ある職場にしていくことが求められている。



出典：労働厚生省「毎月勤労統計調査」年度制より国土交通省作成



出典：日建協「2018年時短アンケート」を基に作成

図3 建設業における年間実労働時間の推移・休暇取得の状況

こうしたことを受け、国土交通省においては、建設現場への新技術の導入による生産性の向上（図4）と併せて、週休2日の確保、労務単価の見直し、適正な予定価格や工期の設定、現場の環境改善など魅力ある建設現場の創出に向けた施策（図5）の促進を図り、新3K（給与が良い・休暇が取れる・希望がもてる）の魅力ある建設現場への改善を推進しているところである。また、各地方整備局等や建設業界、建設コンサルタント業界等においても、それぞれ一般市民を対象にした現場見学会、土木工学系の学生向けの出前講座、建設スキルアップサポート制度等の担い手確保に向けた取り組みを積極的に行っているところである。



出典：国土交通省資料

図4 i-Constructionの推進～建設現場の生産性向上～

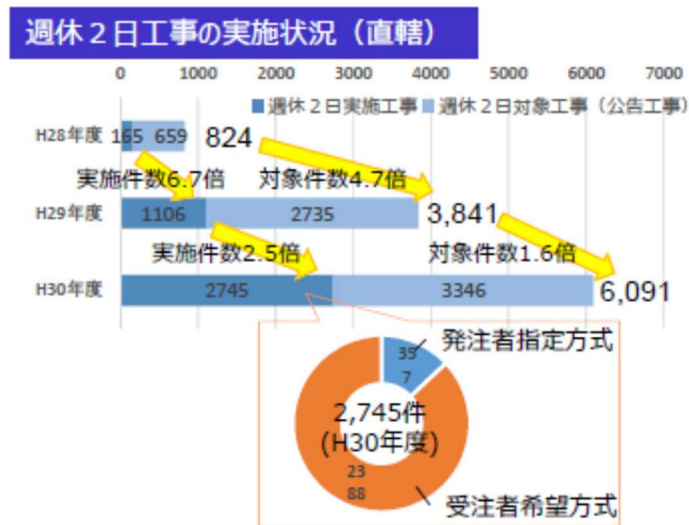


図5 週休2日の確保

とはいえ、一度染みついた負のイメージの払拭や現場環境の改善は容易なものではなく、発注者、元請け、下請け企業らが共通の目標の下、一体的な取組を継続的かつ強力に推進する必要がある。

これらの認識を踏まえ、「建設現場で働く人々の誇り・魅力・やりがい検討委員会」(以下、委員会)では、建設業を根底から支える”建設現場で働く人々”の「誇り」・「魅力」・「やりがい」の向上を図るための基本方針や具体の取組について提言するものである。

なお、この提言は、一般市民から見た建設産業のイメージ改善を一つの目的としているため、不特定多数の一般市民に利用される機会の多い土木分野を中心に議論を進めるが、土木分野に限定するものではなく、建築分野等への適用も含め、建設産業全体を包含するものである。

第2 「誇り・魅力・やりがい」向上にむけた取組の方向性

(1) 建設現場で働く人々の「誇り」「魅力」「やりがい」とは

建設現場で働く人々の「誇り」「魅力」「やりがい」とは何なのだろうか。関東地方整備局では、建設現場での技術者の思い(技術者スピリッツ)をホームページ(<http://www.ktr.mlit.go.jp/gijyutu/index00000022.html>)に掲載しているが、その中から、参考になる意見を拾ってみた(図6(※以下同様))。

- ・ 地域の皆様に世代を超えて安全・安心を届け、「便利になった!」と言われる

「モノ」造りを目指す。

- 多くの人と関わりながら、そこで暮らす人々の安全・安心を守り、社会に貢献できる誇りとやりがいを感じる。
- 地図に残るものづくりに携わることができるので毎日が充実。
- ビッグプロジェクトを成功に導く一員になれるのがこの仕事のやりがい。責任ある立場を任せられ、現場の見方が変わった。
- 無事に開通出来たときの達成感やまちの環境や風景が変わることへの感慨。その場に立ち会えるやりがい。
- 図面で表現されたモノが、様々な作業工程が積み重なり、現場で施工されていく過程を間近で見れることが最大の魅力。
- 若手不足と言われる今だからこそ、活躍できるチャンス。



出典：国土交通省 関東地方整備局 HP

図6 (※以下同様) 建設現場に従事する技術者の紹介 (技術者スピリッツ)

これらを集約し、建設現場で働く人々の「誇り」「やりがい」「魅力」を次のように定義づけることとしたい。

「誇り」：一般市民に対して胸を張れること

「やりがい」：働く人々が仕事を通じて満足できること

「魅力」：一般市民が、働く人々の「誇り」や「やりがい」を感じ、好意的な関心を持つこと

「誇り」「やりがい」「魅力」は、建設現場で働く人々一人一人の行動や情報発信を通じてそれぞれが高まっていくとともに、相互に関連し合うことで高まりあっていくものである。建設現場で働く人々の「誇り」「やりがい」が向上することで、建設現場の「魅力」の向上につながり、魅力の向上がさらに「誇り」「やりがい」を向上させるという好循環につなげていくことが理想であり、建設現場

